

雅歌

第一章一これはソロモンの雅歌なり二ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり 汝の愛は酒よりもまさりぬ三なんぢの香膏は其香味たへに馨しくなんぢの名はそがれたる香膏のごとし是をもて女子等なんぢを愛す四われを引たまへわれら汝にしたがひて走らん 王われをたづさへてその後宮にいれたまへり 我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんぢの愛をほめたたふ 彼らは直きころをもて汝を愛す五エルサレムの女子等よわれは黒けれどもなほ美はしケダルの天幕のごとくまたソロモンの帷帳に似たり六われ色くきが故に日のわれを焼たるが故に我を視るなかれわが母子等われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり 我はおのが葡萄園をまもらざりき七わが心の愛する者よなんぢは何處にてなんぢの群を牧ひ 午時いつこにて之を息まするや 請ふわれに告よなんぞ面を覆へる者の如くしてなんぢが伴侶の群のかたはらにをるべけんや 八婦女の最も美はしき者よなんぢ若しらずば群の足跡にしたがひて出ゆき 牧羊者の天幕のかたはらにて汝の羔山羊を牧へ九わが佳耦よ 我なんぢをパロの車の馬に譬ふ一〇なんぢの臉には鏈索を垂れなんぢの頭には珠玉を陳ねて至も美はし二われら白銀の星をつけたる黄金の鏈索をなんぢのために造らん 三王其席につきたまふ時わがナルダ其香味をい

だせり 三わが愛する者は我にとりてはわが胸のあひだにおきたる没薬の袋のごとし 四わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にあるコベルの英華のごとし 五ああ美はしきかなわが佳耦よ ああうるはしきかななんぢの目は鴿のごとし 六わが愛する者よ ああなんぢは美はしくまた樂しきかなわれらの牀は青緑なり 七われらの家の棟梁は香柏その垂木は松の木なり 第二章一われはシャロンの野花谷の百合花なり 二女子等の中にわが佳耦のあるは荆棘の中に百合花のあるがごとし 三わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし 我ふかく喜びてその陰にすわれり その實はわが口に甘かりき 四彼われをたづさへて酒宴の室にいれたまへり その我上にひるがへしたる旗は愛なりき 五請ふなんぢら乾葡萄をもてわが力を おぎなへ 林檎をもて我に力をつけよ 我は愛によりて疾わづらふ 六彼が左の手はわが頭の下にあり その右の手をもて我を抱く 七エルサレムの女子等よ 我なんぢらに 獐と野の鹿とをさし 誓ひて 請ふ 愛のおのづから起るときまでは 殊更に喚起し 且つ 醒す なかれ 八わが愛する者の聲きこゆ 視よ 山をとび 岡を躍りこえて来る 九わが愛する者は 獐のごとく また 小鹿のごとし 視よ 彼われらの 壁のうしろに 立ち 窓より 覗き 格子より 窺ふ 一〇わが愛する者われに語りて言ふわが佳耦よ わが美はしき者よ 起ていできたれ 一 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみては やさりぬ 二 もろもろの花は地にあらはれ 鳥のさへづる時すでに至り 班鳩の聲わ

れらの地にきこゆ三 無花果樹はその青き果を赤らめ 葡萄の樹は花さきてその馨はしき香氣をはなつわが佳耦よわが美しき者よ 起きて出きたれ 四 磐間をにり 斷崖の窟處にをるわが鴿よ われに汝の面を見させよ なんだの馨をきかしめよ なんだの馨は愛らしく なんだの面はうるはし 五 われらのために狐をとらへよ 彼の葡萄園をそこなふ 小狐をとらへよ 我等の葡萄園は花盛なればなり 六 わが愛する者は我につき 我はかれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ 七 わが愛する者よ 日の涼しくなるまで 影の消るまで 身をかへして 出ゆき 荒き山々の上にありて 獐のごとく 小鹿のごとく せよ

第三章 夜われ床にありて 我心の愛する者を たづねしが 尋ねたれども 得ず 二 我おもへらく 今おきて 邑をまはり ありき わが心の愛する者を 街衢あるひは 大路にて たづねんと 乃ちこれを 尋ねたれども 得ざりき 三 邑をまはり ありく 夜巡者ら われに 遇ければ 汝らわが心の愛する者を見しやと 問ひ 四 これに 別れて 過ゆき 間もなく わが心の愛する者の 遇たれば 之をひきとめて 放さず 遂に わが母の 家にとも なひゆき 我を産し 者の 室にいりぬ 五 エルサレムの 女子等よ 我な なんだらに 獐と 野の 鹿とを さし 誓ひて 請ふ 愛のおのづから 起る 時まで 殊更に 喚起し 且つ 醒すな かれ 六 この 没薬乳香など 商人のもろもろの 薫物をもて 身をかをらせ 煙の柱のごとくして 荒野より 来る者は 誰ぞや 七 視よ 此は ソロモンの 乘輿にして 勇士 六十人 その 周圍に あり イスラエルの 勇士 なり 八

みな 刀劍を 執り 戦鬪を 善す 各人 腰に 刀劍を 帶て 夜の 警誠に 備ふ 九 ソロモン王 レバノンの 木をもて 己のために 輿をつくれり 一〇 その 柱は 白銀 その 欄杆は 黄金 その 座は 紫色にて 作り その 内部には イスラエルの 女子等が 愛をもて 繡たる 物を 張つく 一 一 シオンの 女子等よ 出きたりて ソロモン王を見よ かれは 婚姻の 日心の 喜べる 日に その 母の 己にかつ ぶらしし 冠冕を 戴けり

第四章 一 ああ なんだ 美は じきかな わが 佳耦よ ああ なんだ じきは じきかな なんだの 目は 面帕の うしろに ありて 鴿のごとし なんだの 髪は ギレアデ山の 腰に 臥たる 山羊の 群に 似たり 二 なんだの 齒は 毛を 剪たる 牝羊の 浴場より 出たる がごとし おのおの 雙子をつみて ひとつも 子なきものは なし 三 なんだの 唇は 紅色の 線維のごとく その 口は 美は し なんだの 頬は 面帕の うしろに ありて 石榴の 半片に 似たり 四 なんだの 頸項は 武器庫にて 建たる ダビデの 成樓のごとし その 上には 一千の 盾を 懸け 列ぬ 五 勇士の大楯 なり 五 なんだの 兩乳房は 牝獐の 雙子なる 二箇の小鹿が 百合花の中に 草は みを るに 似たり 六 日の 涼しくなる まで 影の 消る まで われ 没薬の 山また 乳香の 岡に 行べし 七 わが 佳耦よ なんだは ことごとく うるはしく して すこしの ぎずも なし 八 新婦よ レバノンより 我にとも なへレバノンより 我にとも に 來れ アマナの 巔 九 セールまた ヘルモンの 巔より 望み 獅子の 穴また 豹の 山より 望め 九 わが 妹わが 新婦よ なんだは わが心を 奪へり なんだは 只 一目をもて また 頸玉の 一をもて わが心を づば へり 一〇 わが 妹

わが新婦よなんぢの愛は樂しきかななんぢの愛は酒よりも遙  
 にすぐれなんぢの香膏の馨は一切の香物よりもすぐれたり二  
 新婦よなんぢの唇は蜜を滴らすなんぢの舌の底には蜜と乳と  
 ありなんぢの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし三 わが妹  
 わがはなよめよなんぢは閉たる園閉たる水源封じたる泉水の  
 ごとし三 なんぢの園の中に生いづる者は石榴及びもろもろの  
 佳果またコペル及びナルダの草四 ナルダ番紅花荳蒲桂枝さ  
 まさまの乳香の木および没薬蘆薈一切の貴とき香物なり五 な  
 んぢは園の泉水活る水の井レバノンよりいづる流水なり六 北  
 風よ起れ南風よ來れ我園を吹てその香氣を揚よねがはくは  
 わが愛する者のおが園にいりきたりてその佳き果を食はんこ  
 とを

第五章一 わが妹わがはなよめよ 我はわが園にいりわが没薬と  
 薰物とを採りわが蜜房と蜜とを食ひわが酒とわが乳とを飲り  
 わが伴侶等よ請ふ食へわが愛する人々よ請ふ飲あけよ二 われ  
 は睡りたれどもわが心は醒りたり時にわが愛する者の聲あり  
 即はち門をたたきていふわが妹わが佳耦わが鴿わが完きもの  
 よわれのために開けわが首には露滿ちわが髪の手には夜の  
 點滴みてりと三 われすでにわが衣服を脱りいかでまた着るべき  
 已にわが足をあらへりいかでまた汚すべき四 わが愛する者戸の  
 穴より手をさしいれしかばわが心かれのためにうごきたり五 や  
 がて起いでてわが愛する者の爲に開かんとせしとき 没薬わが

手より没薬の汁わが指よりながれて關木の把柄のうへにした  
 たり六 我わが愛する者の爲に開きしにわが愛する者は已に退  
 き去りぬさきにその物いひし時はわが心さわぎたり我かれを  
 たづねたれども遇す呼たれども答應なかりき七 邑をまはりあり  
 く夜巡者等われを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわが  
 上衣をはぎとれりハエルサレムの女子等よ 我なんぢらにかたく  
 請ふもしわが愛する者には汝ら何とこれにつくべきや 我  
 愛によりて疾わづらふと告よ九 なんぢの愛する者は別の人の愛  
 する者に何の勝れるところありや 婦女の中のいと美はしき者  
 よなんぢが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところ  
 ありて斯われらに固く請ふや一〇 わが愛する者は白くかつ紅に  
 して萬人の上に越ゆ二 その頭は純金のごとくその髪はふさや  
 かにして黒きこと鳥のごとし三 その目は谷川の水のほとりに  
 をる鴿のごとく乳にて洗はれて美はしく嵌れり三三 その頬は馨  
 しき花の床のごとく香草の壇のごとしその唇は百合花のごと  
 くにして没薬の汁をしたたらす四 その手はきばみたる碧玉を  
 嵌し黄金の釧のごとく其軀は靑玉をもておほひたる象牙の  
 彫刻物のごとし五 その脛は蠟石の柱を黄金の臺にてたてる  
 がごとくその相貌はレバノンのごとくその優れたるさまは  
 香柏のごとし六 その口ははなはだ甘く誠に彼には一つだにう  
 つくしからぬものなしエルサレムの女子等よこれぞわが愛する  
 者これぞわが伴侶なる

第六章 一 婦女のいと美はしきものよ 汝の愛する者は何處へゆきしやなんぢの愛する者はいつこへおもむきしやわれら汝ともたつねん二わが愛するものは己の園にくだり 香しき花の床にゆき園の中にて群を牧ひまた百合花を探る三我はわが愛する者につきわが愛する者はわれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ四わが佳耦よなんぢは美はしきことテルザのごとく華やかなることエルサレムのごとく 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし五なんぢの目は我をおそれしむ 請ふ我よりはなれしめよなんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり六なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとしおのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし七なんぢの頬は面帕の後にありて石榴の半片に似たり八 后六十人 妃嬪八十人 數しられぬ處女あり九わが鴿わが完き者はただ一人のみ 彼はその母の獨子にして産たる者の喜ぶところの者なり 女子等は彼を見て幸福なる者となへ 后等 妃嬪等は彼を見て讚む一〇この晨光のごとくに見えわたり 月のごとくに美はしく 日のごとくに輝やき 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき 者は誰ぞや二 われ胡桃の園にくだりゆき 谷の青き草木を見 葡萄や芽しし石榴の花や咲しと見返しをりしに三 意はず 知す 我が心われをしてわが貴とき民の車の中間にあらしむ三 歸れ 歸れ シュラミの婦よ 歸れ 歸れ われら汝を観んことをねがふな んぢら何とてマハナイムの跳舞を観ることくに シュラミの婦を

觀んとねがふや

第七章 一 君の女よなんぢの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな 汝の腿はまろらかにして玉のごとく 巧匠の手にて作りたるがごとし二 なんぢの臍は美酒の缺ることあらざる 圓き杯盤のごとく なんぢの腹は積かさねたる麥のまはりを百合花もてかこめるが如し三 なんぢの兩乳房は牝鹿の雙子なる二の小鹿のごとし四 なんぢの頸は象牙の成樓の如く 汝の目はヘシボンにて パテラビムの門のほとりにある池のごとく なんぢの鼻はダイヤモンドに對へるレバノンの成樓のごとし五 なんぢの頭はカルメルのごとく なんぢの頭の髪は紫花のごとし 王その垂たる髪につなぐれたり六 ああ愛よもろもろの快樂の中にありてなんぢは如何に美はしく如何に悦ばしき者なるかな七 なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しく なんぢの乳房は葡萄のぶさのごとし八 われ謂ふこの棕櫚の樹にのぼりその枝に執つかんとなんぢの乳房は葡萄のぶさのごとく なんぢの鼻の氣息は林檎のごとく 匂はん九 なんぢの口は美酒のごとし わが愛する者のために滑かに流れくだり 睡れる者の口をして動かしむ一〇 われはわが愛する者につき 彼はわれを戀したふ二 わが愛する者よわれら田舎にくだり 村里に宿らん三 われら夙におきて 葡萄や芽しし 荅やいでし 石榴の花やさきし いざ葡萄園にゆきて見んかしこにて我わが愛をなんぢにあたへん三 戀加かくはしき香氣を發ちもろもろの佳き果物古き新らしき共にわが戸の上に入りわが愛する者

よ我これをなんぢのためにたくはへたり

第八章 一ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことをわれ戸外にてなんぢに遇ふとき接吻せん然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじニわれ汝をひきてわが母の家にいたり汝より教晦をつけん我かくはしき酒石榴のあまき汁をなんぢに飲しめんニかれが左の手はわが頭の下にありその右の手をもて我を抱く四エルサレムの女子等よ我なんぢ等に誓ひて請ふ愛のおのつから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ五おのれの愛する者に倚かかりて荒野より上りきたる者は誰ぞや林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませりなんぢの母かしこにて汝のために劬勞をなしなんぢを産し者かしこにて劬勞をなしぬ六われを汝の心におきて印のごとくしなんぢの腕におきて印のごとくせよ其の愛は強くして死のごとく嫉妬は堅くして陰府にひとしその焔は火のほのほのごとしいとまげしき焔なり七愛は大水も消ことあたはず洪水も溺らすことあたはず人その家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとすると尚いやしめらるべし八われら小さき妹子あり未だ乳房あらずわれらの妹子の問聘をつくる日には之に何をなしてあたへんや九かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん彼もし戸ならんには香柏の板をもてこれを圍まん一〇われは石垣わが乳房は成樓のごとし是をもてわれは情をかうむれる者のごとく彼の目の前にありき一パール八モンにソ口

モンぶたうそのの葡萄園ぶたうそのをもてりこれをその守る者等にあづけおき彼等をしておのおの銀一千をその果のために納めしむニわれ自らみずかの有なる葡萄園ぶたうそのわれの手にありソ口モンなんぢは一千を獲よその果をまもる者も二百を獲べしニなんぢ園の中に住む者よす伴侶等なんぢの聲に耳をかたむく請ふ我にこれを聽しめよ一四わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ香はしき山々の上やまやまにありて獐しかのごとく小鹿のごとくあれ